

1987. 7



オスカー・ワイルド作『サロメ』に付されたビアズリーの挿絵

風 潮

西 垣 昭

私が、相模のキャンパスに勤めるようになって、一年半を過ぎようとしている。大学を卒業して以来、殆どが東京都内での仕事であった為、仕事場までの足は、もっぱら車を利用する方が楽であった。

しかし、現在はコマーシャルの“通勤快足”ではないが、通勤電車を利用する一人となった。車を使っても来られない距離ではないが、一般道路だと約2時間、高速道路を使つたとしても1時間半、それに、高速料金が片道700円ともなれば昼飯抜ききの生活になってしまいそうである。

毎日、同じ時刻に電車に乗り、同じ場所へ通勤するリズムは非常に束縛された上に、電車の中では人との違和感をも抱いたものである（少しオーバーかな？）。車での通勤は、職場に着くまでが自分の時間（拘束されない時間）、という雰囲気であったのが、何故か電車は、箱の中へ詰められ“宅急便”のようにして仕事場に配達されるような気持さえた。しかも、その後のバスがプラスαされることは、輪を掛けてストレスを昂じさせることにもなる。しかし、こんな事ばかり言っていられない。デメリットな条件を、メリットにして行くことが理に適うというものであり、通勤電車が満更でもないと言える為には、有意義な時間に変えなければならない。それは読書タイムである。一日の生活の中で、行き帰り35分づつの時間が取れること、特に読書タイムと限らず、自分の空白の時間、つまり余暇時間とも言える。私は経堂に住んでいるので、朝の職場に向けて（下り）は専門書

を読み、帰宅（上り）には疲れを癒やす意味でも、昇り調子になるような単行本や、趣味的な本を読むということにしている。しかし、帰り（上り）は、本を読む前に相模大野の駅付近でどこかに立寄り、ボルテージが上がってしまい、電車に乗って本を開いたまでは良いが、気が付くと、「下北沢、下北沢」の声に慌てて下り電車に乗り込み、気分も一瞬にして“下り”となることも度々ある。こんなこともありながら、一年半で数十冊の本を読めたことは、電車を利用するようになったおかげと考えるべきである。

電車の中で読み物をしている人の数は、他の国に比べると、日本が一番多いという話を聞いたことがある。読み物といっても色々な種類に分れる訳だが、“マンガ本”を読んでいる人を多く見かける。せめて学生風止りであれば良いが、ネクタイ姿のサラリーマン風の人までが、真剣にマンガを読んでいる姿には、何とも言いようのない気持である。

しかし、このマンガには、その時代、時代の社会の風潮が、非常にシビヤーに表現されている。私の、子供の頃の代表的マンガに、

「巨人の星」というマンガがあり、その描き方は、友情、努力、勝利を三本柱として、一に努力、二にも努力と、ひたすら夕陽を背に受け、努力をしながら栄光の勝利を手にした主人公、星君であった。しかし現代のマンガには、この努力というイメージを出来るだけ場面に描かず、生まれ持った才能を生かし、天才少年的な主人公が勝利を勝ち取る流れになっている。才能のない者が努力をすること

によって、ヒーローと成得ることはなく、非常に冷めた見方がある。努力がなくなり、友情、優しさ、勝利の三本柱は、まさしく現代の子供達の風潮を物語っている。このことは、マンガの世界だけに限らず、単行本などにも言えているような気がする。

風潮といえば、若者のファッションにもなっている通称“ウォークマン”カセットテープレコーダーであるが、近頃は、若者に限らず耳にイヤホーンをつけて電車に乗っている人の姿を多く見掛ける。私も、時々聴いている一人であるが、「チャカチャカ、ドンドンタッタ」と、どこからともなく、伴奏音だけが聞こえてくるのは非常に近所迷惑な話であり、中には座って聴きながら、眠りながら、そして隣の人の肩を枕代りにしている人がいるのには困ったものである。

しかし、このウォークマンの使い方にも時代の流れがあり、一つの流行を呼び起こしている。それは、「カセットブック」である。目で読む時代から、耳で読む時代への変わりつつあり、各出版社から出されたテープは、順調に売れている。ここにも、本を読むという努力の場面がなくなりつつある。

前回のエッセイにも、何方かが書かれていたが、「手垢のついた本」、というお話しが載っていたが、これからは、「手垢のついたカセット」、になるとすれば何か寂しい一面が少しづつ、身の廻りを取り囲んで来るように思える。(体育)

図書館から一言

図書館内には、カバン・袋類は一切持ち込むことができません。ロッカーを利用する際は、盗難防止の為、貴重品は必ず身につけて入館して下さい。

《夏休み中のお知らせ》

夏期休暇中の開館、貸出等については下記のとおりとします。

1) 長期貸出

貸出期間 7月16日(木)～9月19日(土)

冊数制限はありません。

(但し、雑誌は対象外です)

2) 開館時間

7月20日(月)～9月12日(土)

平日 午前 9時から 午後 5時まで

土曜日 午前 9時から 午後 1時まで

3) 閉館

7月27日(月)～8月1日(土)

蔵書点検の為

蔵書点検の為アルバイト募集!!

1. 期間 昭和62年7月27日(月)～31日(金)

2. 時間 午前9時から午後5時まで

3. 人数 8～9名(男・女問わず)

4. 業務内容 図書の照合作業

※ 但し、汚れてもかまわない服装で。

5. 時間給 600円

※ 但し、交通費は支給せず。

上記要領にてアルバイトを募集します。

申し込みは、教養図書館カウンターにて受け付けます。

本と図書館・雑感

加藤 末広

本あるいは図書館についてのエッセイを書くということで、自分の書棚から以前に読んだ本などを引き出し読み返していると、いろいろなことが思い出されたり、さまざまな考えが頭に浮んできたりする。この小文ではその中から主として僕の専門である数学に関することなどを、やや雑感めいた形で綴ってみたいと思う。

◇ ◇ ◇

まず、子供の頃のことだが、その頃はなぜかあまり図書館で本を貸りたりした記憶はない。と言っても書物はどちらかといえば読んだ方で、特に小説などはよく読んでいたと思う。まだ印刷の匂のする真新しい本を新鮮な気持ちで一枚一枚頁を追いかけるのが確か好きだったように思う。それだからかどうしても図書館は敬遠しがちになってしまったのかもしれない。また、大勢の人達の中では注意が散漫する性格だったこともあり、閲覧室もあまり利用したことがなかったように思う。

だが、大学に入ってからには図書館も当然必要不可欠なものになっていった。読書が増えたこともあるが、専門書は学生の身にとっては高すぎたし、また本屋へ行っても絶版などで見付からないものが多かったこともある。大学院に進み自分なりの研究をするようになってからは、一般書以外に専門の数学の雑誌を利用する機会も増した。それらはふつう持出し禁止なので、数学科付属の図書室で読むかあるいはコピーを撮るなどしていた。図書

室はそれ程広い部屋ではなかったが、皆が集って議論に話を咲かせる場所でもあった。そこでお互い友達などと興味のある事とか各自研究している事などについて意見を交換しあうのは楽しかったし、一方先生方からは僕が取り掛かっている問題についてのアドバイスを受けたり、最新の数学の話題及びそれを理解するのに必要な文献などについて伺ったりなどよくしていた。そこで学んだりした事は現在の自分の仕事にとっても非常に重要な柱となっているように思う。自分一人になって考えたり計算したりしたい時は大学の中央図書館閲覧室をよく利用した。少々古臭い感じのする部屋だが落ち着いた雰囲気ですぐ論文などはよくそこでまとめた。一仕事を終えた後図書館を出、既に灯が点り出した中庭を通して帰る時の何かほっとした安堵感、それに充実感は今も昨日のことのよう思い出す。

さて、数学の勉強を続けていくうちに僕の本や論文の読み方も大分変わってきた。最初のうちは兎に角一文一文隅々まで理解しながら読もうとしていた。数学は論理を武器とする学問だから、論理に穴を開けたまま読み進むのはまやかしかだと考えていたせいもあるだろう。しかし当然こういう読み方をしていると一冊を読み終えるのに長い時間がかかるし、実際最後まで読み切れた本も少ない。従ってそのような読み方だけではいろいろと支障をきたすので次第に飛ばし読みしたり、必要な箇所などを中心にした読み方が増えてきた。しかし、後者のような読み方が少しはうまくなったのは自分でテーマを選んで何かを研究するようになってからではないかと思う。実際自分で問題意識を持って書物とか論文を読んでいこうとすると、不思議と「どこが本質的なところなのか」とか「知りたいことは何なのか」などかなり明確になってきたし、さ

らにまた本あるいは論文全体の流れもある程度感覚的に捉えられるようになってこれように思う。さらに最近では忙しさを理由に論文など「序文」だけしか読まない場合もかなり多いが、これなどは逆に先生から論文を書く際、「大事なことはすべて序文の中に織り込め」とよく教えられていた事を悪用してしまっているのかもしれない。

専門書は、図書館で借りるだけでなく、自分でも少しづつ買い求めていったが、手に入りにくい本などを中心によくコピーもした。自分の本を持っていて有難いのは気のついたことなど欄外に書き込みが出来ることで、それにより後で読み返すときの参考になったり、また考えなどをまとめる際の手助けになったりする。欄外といえば数学に関してはフェルマの大定理を思い出す。フェルマは彼の手控本にある一つの定理に関連してその大定理を述べた後に、「その証明を記すにはその欄外は狭すぎる」と有名な言葉を残した。ただし実際には、その証明は今まで多くの数学者によって試みられてきているが、未だ一般的には解決されてはいないようだ。また、ある本で読んだが、夏目漱石の欄外の書き入れも彼の鋭い批評精神を窺い知る事が出来非常に興味深いそうである。一般に図書館の本は落書きは勿論書き込みなども駄目で、それは全く当然のことだろうと思う。しかし、もし書き込みとか覚え書きのようなものが自由に出来るような図書館が仮に存在したとしたら、これらの本の中から何か読者の息遣いのようなものが聞こえてくるようでとても面白いような気もする。

最後に、図書館とは結局は読み手と本との対話の場であると思うが、その点からみて少々不満はあるにしても現在の図書館は蔵書数にしても設備、サービス面にしても明らかに進

歩してきている。僕としてはさらにそこがこの対話の後の読者の思索、及びその思索の中から何か新しいものを生み出そうとする精神にとっての場として十分な機能も果し得るとするならば、それは本当の意味で“贅沢”な図書館であると思えてくるのである。

(数学)

☆☆☆ 求める図書は、 どこに？ ☆☆☆

入学してから早、三ヶ月。図書館の利用のしかたにも、そろそろ慣れてきましたか。

なかには、まだ不慣れでせっかく図書館に来て、求める資料を手に入れることなく帰っていく人をみかけます。そんな人の為に、ここでは求める資料により早くたどりつく方法を説明しましょう。

一般に、図書には書名・著者名・出版社名・出版年等の手がかりがあります。

教養図書館の目録には、

- 1) 書名がわかっている場合、
書名で探す書名目録。
- 2) 著者、あるいは編者がわかっている場合、
著者名で探す著者名目録。
- 3) ある、特定の物事について調べたい場合、
主題で探す書架目録。

の三つがあります。少なくとも、一冊の図書に対して三つの探し方があるわけです。その他、特定の出版社で出している出版目録、年度毎に出ている出版年鑑等、あらゆる可能性を調べて、求める図書を自分で探してみませんか。

わからない事があつたら、何でも尋ねてください。きっと、道が開けることでしょう。

◆ 教養図書館現有蔵書数と昭和61年度貸出数

(昭和62年3月31日現在)

蔵書数(冊)	比率(%)	主 題	NDC	貸出数(冊)	比率(%)	貸出数 蔵書数(%)
3,966	6	総 記	000	73	1	2
5,790	8.5	哲 学	100	452	5	8
6,341	9	歴 史	200	216	3	3
9,668	14	社 会 学 科	300	543	6	6
17,406	25	自 然 科 学	400	4,934	59	28
2,082	3	工 学 ・ 工 業	500	255	3	12
1,016	1.5	産 業	600	101	1	10
3,968	6	芸 術 ・ 体 育	700	254	3	6
3,724	5.5	語 学	800	235	3	6
13,161	19	文 学	900	973	12	7
1,715	2.5	未 分 類	新書他	300	4	17
68,837	100	合 計		8,336	100	12

上記の表は、去年一年間の貸出数と、蔵書数に対する貸出数の比率です。

教養図書館にしかない多数の図書が、まだまだ利用もされずに眠っています。

一年生の間に、より多くのジャンルの図書に触れてみませんか。

下表は、学年別の貸出比率を表にしたものです。

◆ 昭和61年度 学年別(所属別)貸出比率

	単行本(冊)	雑 誌(冊)	合 計(冊)	比 率(%)
1 学 年	5,820	311	6,131	(80)
上 級 生	1,457	34	1,491	(20)
学 生 計	7,277	345	7,622	86
教 職 員	1,059	222	1,281	14
合 計	8,336	567	8,903	100

書 評

A. パイス

『神は老獺にして……』

小 野 健 一

「アインシュタインの人と学問」という副題がついている。著者のパイスは高名な理論物理学者、普通の伝記とちがって、アインシュタインの数々の学問的業績の形成されて行く過程を克明に辿って行く誠にユニークな伝記で、その点ではE. Segrèの《Enrico Fermi Physicist》と同じカテゴリーの著書である。但し、Segrèの小冊子と違って700ページ余の膨大な著述であるから、はるかに緻密に、微に入り細を穿ってアインシュタインの学問的人生が辿られて行く。

思い掛けず、まるまる一月ほど入院する破目になったので、この本を持って行っただが、内容も物理的重量も誠に重い本で、病床で寝乍ら読むのにはあまり適当ではなかったが、それでも退院までに何とか読了に漕ぎつけることができた。

アインシュタインの業績の中では、何と言っても一般相対論が最大のものであるが、この本でも、一般相対論の個処が一番ドラマティックで面白い。読み乍ら、アインシュタインと一所に興奮と失望をくりかえし、行きづまり、困惑し、燭光を見だし、間違いに気付き、苦渋に苦渋を重ねて遂に正しい重力方程式に到達するまで、覚えず我を忘れて夜更かしを重ねる始末であった。

しかし、この本の最もユニークな点は、アインシュタインの量子力学観の解釈と、それと彼の統一場理論にかたむける情熱との関係の解説であろう。この点が私には一番勉強になったし、読了して眼から鱗の落ちる感銘を

受けた。アインシュタインの統一場理論の本当のねらいは、重力の場と電磁場とを統一することではなくて、量子力学と一般相対論とを統一することだったのである。そのための数学的言葉として、最後まで微分幾何学に固執して、そこから一步も出ようとしなかったのがアインシュタインの悲劇であった。量子力学と一般相対論との統一は、今日でも勿論 open question である。私どもがアインシュタインから汲み取るべきものはまだまだ残っているのである。

訳文は、てにをはの使いかたが文脈にそぐわない個所がところどころ気になる。数式の間違いもいくつかあったようである。しかし、それらはその都度添削しながら読めば不都合というほどのものではない。原書名は《Subtle is the Lord》. Subtleを老獺と訳すのには全く賛成できない。老獺では語感がまるで違うではないか。（物理学）

図書館利用Q & A ②新聞

Q: 何種類の新聞がありますか？

A: 教養図書館では、朝日・毎日・読売・日本経済の各新聞のほか、神奈川・北海道・河北・信濃毎日・中国・西日本・沖縄タイムズの地方紙、読書新聞、英字新聞、専門紙など約20種ほど受入しています。

Q: 去年の記事を調べたいのですが。

A: 新聞は3ヶ月保存して廃棄します。それ以前のものを読みたい場合は縮刷版（朝日・毎日・読売・日本経済）を利用して下さい。

□ 表 紙 解 説

オスカー・ワイルド作『サロメ』に付されたピアズリーの挿絵

伊 藤 幸 子

ユダヤの王女サロメはヘロデ王に踊りを見せる代りに、彼女の熱い想いに応えてくれない予言者ヨハネの首を要求する。この願いがかなえられ、恋焦がれた男の首が銀の楯にのせてもたらされると、彼女はその生首に接吻する。“私はお前の口に口づけした、お前の口に口づけしたのだよ”，遂に想いを遂げたというこの勝利の叫びは、当然のことながら一抹の苦味を伴わずにはいない。

オスカー・ワイルド描くところのサロメは、本能の呼び声に従って願望を貫き通す火の玉のような女である。ヨハネの口に接吻して想いを遂げた時、彼女はもはやこの世に望むものはない。その後直ちにヘロデ王の命によって殺されるのはむしろ当然の成りゆきである。恋する男を殺させ自らも刃に伏すことにより、彼女はその恋を永遠のものにした。

情熱の女サロメの苛烈な胸の裡を描くのには、ピアズリーの切れ味の鋭い克明な線描ほどふさわしいものがあるだろうか。モローを初め、ルドン、クリムトなどサロメを描いた画家は多いが、男臭いエロティシズム、思い切った誇張と精緻な装飾性の対比の妙、歌舞伎の残酷の美学を想わせるグロテスクの美において、白と黒のみをもって鮮明に灼きつけられるピアズリーの図柄にまさるものはない。

オーブリー・ピアズリーは、19世紀もまさに暮れなんとするたそがれの空を、一條の妖しい光芒を引いてよぎり去った天才である。世紀末の声もようやくかまびすしい一世紀後の今日、おのれの激情のおもむくまま潔く果てた恋の女と、沈黙に青ざめた予言者の首とは、果して何を語り出でようとするのだろうか。（英語）

□ 前期試験に備えて

1) 開館延長

7月4日、11日の両土曜日は午後3時まで開館します。（平日は午後6時まで）

2) 一部図書の貸出期限変更について

試験期になると、一部の図書に利用が集中しがちです。このため、予約の多いものに限り、一夜貸し、三日貸し等の措置をとることがあります。

□ 編 集 後 記

今回は、西垣先生と加藤先生にエッセイを、伊藤幸子先生に表紙解説をお願いしました。

また、書評欄に小野先生の寄稿を掲載しました。

蔵書数と貸出数の比較表は、いかがでしたか。図書館利用のきっかけともなればよいのですが。

閲覧ニュース 52号 1987.7 発行

発行責任者 手 塚 甫

北里大学教養図書館
〒228 相模原市北里1-15-1
電話(0427)78-8005